

## アメリカン・ドリームという言葉の起源と発展 公民権運動との関係を中心に

白木三慶

本文で検証するようにアメリカン・ドリームという言葉が一九三一年に普及したことから、この言葉の歴史を研究するには少なくとも二つの方法がある。一つ目は普及以前に遡り、その言葉が喚起させるアメリカの理想の変遷を辿るものである。ジム・カレン (Jim Culen) の『アメリカン・ドリーム』(2003)はこの方法を採用している。カレンはアメリカの理想をピューリタンの夢、独立宣言、階級上昇など六つに分類し、一章ごとに理想一つを検証している<sup>①</sup>。もう一つの方法はアメリカン・ドリームという言葉が普及した後に人々がどのようにこの言葉を用いたのかを調べるものである。ローレンス・R・サミュエ

ル (Lawrence R. Samuel) の『アメリカン・ドリーム』(2012)はこの方法を採用している。サミュエルは膨大な使用例を一つ一つ検証し、アメリカン・ドリームという言葉の意味が公的な関心から個人的な関心へと変化したと指摘している<sup>②</sup>。この論文は二つ目の方法を選択し、公民権運動の指導者がどのようにアメリカン・ドリームという言葉を使用していたかを検証する。ただし、サミュエルの研究書が羅列的な記述になっているのに対し、本書は言説の文脈を重視して各々の使用法を比較する。そこでまず、三〇年代に普及した定義では知識を獲得する機会の平等という意味が強調されていたことに注目する。次に、公

民権運動の時代に知識人達がこの言葉を人種的平等と結びつけていたことを示す。こうしてこの言葉の普及と公民権運動における使用を同時に論じることによって、この言葉には多義性があり、現在ではあまり注目されない知識獲得の平等や人種的平等への意識があったことを強調したい。また、三〇年代と六〇年代との言説を同時に分析することによって、国籍や人種という境界線を横切る系譜の作成を試みる。

この論文が選ばなかった、アメリカン・ドリームという言葉が普及する以前に遡りアメリカの理想の変遷を辿る方法には、この言葉が長い歴史を持っていたかのように錯覚させる危険性がある。こうした危険性を持つために、アメリカン・ドリームという言葉は「創られた伝統」に接近する。歴史家エリック・ホブズブーム (Eric Hobsbawm) は「古くから存在するように見える、もしくはそのように主張する『伝統』はしばしばごく最近に起源をもち、時には創られたものである」と述べている<sup>3)</sup>。そしてそうした「伝統」のことをホブズブームは「創られた伝統」と名付けた。アメリカン・ドリームという言葉が「創られた伝統」のように古くから存在するように見えた時、多くのアメリカ人が必要以上に自国を信用して愛国的になってしまっただろう。そうした過剰な愛国主義の喚起を避けるために、この論文はこの言葉が一九三〇年代に生み出されたことを強調

する。

## アメリカン・ドリームの起源

現在用いられているアメリカン・ドリームという言葉は、この言葉が普及した際に示唆していた「知識を獲得する機会の均等」という意味を失っている。『オックスフォード英語辞典』によれば、アメリカン・ドリームとは「アメリカ合衆国の全市民が勤労、決意、そして進取的精神を通じて成功と繁栄を獲得する平等の機会を持つという理想」である<sup>4)</sup>。こうして現在の定義では成功する機会の均等という意味合いが強い。

ではアメリカン・ドリームという言葉はそもそもどのように用いられていたのか。『オックスフォード英語辞典』はアメリカン・ドリームの初期の使用例として以下の二つを挙げている。一つ目は一九一一年に D・G・フィリップス (D. G. Phillips) によって書かれた小説『スーザン・レノックス』の一節である。「服や家の雑誌は〔……〕何千人ものアメリカ人が〔……〕普遍的なアメリカの夢と希望 (the universal American dream and hope) である富の拡大を果たすように準備してきた」<sup>5)</sup>。もう一つは一九一六年の『シカゴ・トリビューン』紙の一節である。「もしアメリカの理想、アメリカの希望、アメリカの夢

(the American dream)、『そしてアメリカ人が建設してきた建造物に維持し保存するために戦う価値がないならば、確立するために戦う価値はなかった』<sup>60</sup>。どちらの場合においても「アメリカの夢」は「希望」や「理想」など他の言葉と並置されている。そのため、アメリカン・ドリームという表現が確立された機会均等という意味を持つ言い回しとして用いられていたとは考えにくい。また、カル・ジルソン (Cal Jillson) は、『ウォルター・リップマン (Walter Lippmann) が一九一四年の『漂流と統制』においてアメリカン・ドリームという言葉を使用した』と述べている<sup>61</sup>。実際リップマンは、「彼〔アメリカの典型的な改革者〕はアメリカン・ドリームを持っていたと思うが、それは訓練を受けていない人間が地の塩になるという表現に要約されるだろう」と述べている<sup>62</sup>。「地の塩」とは聖書に出てくる表現であり、社会の腐敗を防ぐ存在のことを指す。つまり、ここでのアメリカン・ドリームは、訓練を受けていない人間こそが素晴らしいという理想を意味している。こうしてここでのアメリカン・ドリームという言葉の使用法は現在のものから程遠い。裏を返せば、この本が出版された一九一四年にはアメリカン・ドリームという言葉に機会均等という意味がまだ定着していなかったと考えられる。

ジム・カレンやその後アメリカン・ドリームを研究する

研究者たちは、ジェイムズ・トラスロー・アダムス (James Truslow Adams) が一九三一年に出版し、広く読まれた『アメリカの叙事詩』によってこの言葉を普及させたとみなしている<sup>63</sup>。アダムスはニューイングランドに関する三部作を書き、ピューリッツァー賞を受賞した歴史家である。カレンは、「彼〔アダムス〕が実際にその言葉をつくったのか他の者から借用したのかははっきりしないが、彼の出版社がその言葉を使用することを拒否していたことは『アメリカン・ドリーム』という言葉がどこにでも使用されていたわけではないということを示す」と述べている<sup>64</sup>。たしかに、カレンが依拠しているアダムスの伝記には、「彼〔アダムス〕は彼の本を『アメリカン・ドリーム』と名付けるために口論したが、出版社は、消費者は『ドリーム』に決して三ドルを支払わないだろうという理由からその題名を拒絶した」と書かれている<sup>65</sup>。また、議会図書館の検索エンジンを調べると、一九〇〇年代、一〇年代、二〇年代にアメリカン・ドリームという言葉が題名にした本は出版されていない。三〇年代に三冊、四〇年代に五冊、五〇年代に六冊、六〇年代に二五冊、七〇年代に六一冊と三〇年代以降に徐々に使用数が増えている<sup>66</sup>。そして、その検索エンジンでは最初にアメリカン・ドリームを題名に入れた本である『宗教とアメリカン・ドリーム』は一九三四年に出版されているが、ア

ダムスの定義を引用し、アダムスと同じ意味でこの言葉を用いている<sup>13)</sup>。そのため、アダムスがこの言葉を初めて用いたわけではないが、普及させた者である可能性は高いと言えるだろう。

ではアダムスの『アメリカの叙事詩』はアメリカン・ドリームをどのように定義しているのか。まずアダムスはこの言葉を「能力や達成に応じた機会とともに、全ての人のとって生活がより良くより豊かでより充実する土地という夢」と定義する<sup>14)</sup>。この定義は出自ではなく能力に応じて機会が平等に与えられることを強調するという点で、先ほど見た『オックスフォード英語事典』の定義に近い。しかしながら、このエピソード全体を読むと「生活がより良くより豊かでより充実する」という意味が明確になり、現在の定義から逸脱するアメリカン・ドリームの意味が明らかになる。

アダムスは、フロンティアが消滅した後、アメリカン・ドリームは価値観に関する問題に直面していると述べている。つまり、歴史家フレデリック・ジャクソン・ターナー (Frederick Jackson Turner) が主張した、アメリカにおいて文明だけでなくフロンティアという自然の存在が重要だったというフロンティア仮説に同意し、その消滅以後、文明が支配するようになった二〇世紀にはいかなる価値観が求められているのかをアダムスは考察している。アダムスはその答えを出す前にアメリカ

社会の二つの問題を指摘する。一つ目は消費者の人間の増加である。人々は商品を積極的に購入することを社会に勧められ、金銭を支払わない快樂から遠ざけられている。二つ目は経済的秩序への知的労働者の不適合である。経済的圧力は、知的労働者がビジネスの需要や大衆消費に適應することを求める。たとえば新聞は大衆消費に支えられているために、最も低い知的なレベルに思考の質を落とさなければならなくなる。こうした問題を確認した後にアダムスがアメリカン・ドリームの実例として重視するのは議会図書館である。「後者〔制度〕の中でその夢を最も良く体現していると度々思うのは、図書館の国の中で最も偉大な図書館、すなわち議会図書館である」<sup>15)</sup>。そしてその理由として民間の人々との関係に言及している。議会図書館は民間の人々による本の寄付によって発展し、民間の人々が使う図書館である。こうしてアダムスは経済至上主義的な価値観を否定し、一般大衆の知的水準を上昇させるために議会図書館をアメリカン・ドリームの実例とみなしている。

以上のように、一九三〇年代にアメリカン・ドリームという言葉が普及させたアダムスの『アメリカの叙事詩』では成功する機会の均等だけでなく、知識を獲得する機会の平等が重視されていた。『オックスフォード英語辞典』による現在のアメリカン・ドリームの定義では経済的な成功の意味が強いが、この

言葉を普及させたアダムスはその定義の際に、人々が経済に支配される消費者になり知的水準が低下するのを嘆いている。また、『宗教とアメリカン・ドリーム』においてアダムスは物質的豊かさ依存しない生き方を探求した存在として評価されている。こうして、アメリカン・ドリームという言葉の現在の定義と普及の際の定義とは用いられる意味合いに隔たりが存在している。

### アメリカン・ドリームと公民権運動

アメリカン・ドリームという言葉の発展に貢献し、また、その解釈に議論が紛糾した時代の一つは公民権運動の時代である。この時代においてアメリカン・ドリームという言葉は人種的平等に関する言葉として用いられることが多かった。この言葉はスウェーデンの経済学者グンナー・ミュルダール (Gunnar Myrdal) の研究を介し、公民権運動が盛んな一九六〇年代に指導者マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King Jr.)、人類学者セイント・クレア・ドレイク (St. Clair Drake)、指導者マルコム X (Malcolm X)、そして小説家ジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) によって人種を超えた平等に関連する言葉として使用された。アメリカン・

ドリームの研究者ジム・カレンは公民権運動の流れを概観する際、キングを中心に分析してマルコム、ドレイク、そしてボールドウィン論じていない (ボールドウィンを引用してはいるが、分析対象として扱っていない)。そのような分析はアメリカン・ドリームという言葉がこの時代にはキングのみに用いられたかのような印象を読者に与える。そうした歴史の単純化を避けるために、本論ではキングだけでなく、アメリカの悪夢に言及したマルコム、アメリカン・ドリームを題名に含んだ講演集を出版したドレイク、そしてこの言葉を題名にした討論に参加したボールドウィンも分析し、可能な限り多くの公民権運動期におけるアメリカン・ドリームの用法について考察する<sup>16</sup>。

もちろん、彼らのアメリカン・ドリーム観がそれぞれの人種観を完全に表しているわけではない。たとえば、キングとマルコムXの思想は流動的だった<sup>17</sup>。キングは晩年、自身の非暴力という思想に懐疑を抱き、マルコムXは晩年、全ての白人は悪魔であるというかつての思想を捨てようとしていた。本論が強調したいのは、彼らの不変的な思想の本質ではなく、彼らがアメリカン・ドリームという言葉を用いた経緯であり、六〇年代にこの言葉が人種の問題と関わることで複数の解釈を持っているということである。

アメリカン・ドリームという言葉の発展に間接的に貢献した

グンナー・ミュルダールは、一九三〇年代の福祉国家スウェーデンに経済や農業政策など幅広い分野で貢献し、第二次世界大戦時にはナチスを批判し、その後は国連、ヨーロッパ、そしてアジアなど世界中で働いた経済学者である<sup>18)</sup>。一九七四年にはノーベル経済学賞を受賞している。ミュルダールは一九三〇年代にアメリカを訪問した際に人種に関する大著を書き上げることになる。アンドリュウ・カーネギー (Andrew Carnegie) が財産を教育や研究施設に寄付していたために生まれたカーネギー財団は、人種的不平等に関する研究が必要だという申し出を財団のメンバーから受け、ミュルダールに人種問題の調査を依頼し、研究者を雇うために何百万ドルもの研究資金を与えた。

その調査の結果、ミュルダールは『アメリカのジレンマ』(1944) という後の時代に大きな影響を与えた一二〇〇頁を越す大著を書き上げた。分離された教育は違法であるとした一九五四年のブラウン判決においてこの本が人種差別の問題を指摘した研究書として言及されたことは重要である。この本の主な主張は、アメリカの白人が自由や平等を獲得しているのに対し、アメリカの黒人は様々な制限に直面しているというものである。機会の平等を意味する「アメリカの信条 (American Creed)」を白人が信じている一方、黒人はそうした平等を体験することができない。しかしミュルダールは、こうした人種的不平等、

すなわちアメリカのジレンマは直ぐに解決するだろうと結論付けた。

アメリカン・ドリームとの関連で強調したいことは、「アメリカの信条」という『アメリカのジレンマ』の重要な用語がメリカン・ドリームの影響で生まれたことである。まずミュルダールは、独立宣言や憲法の序文に由来する平等を重視する「アメリカの信条」がアメリカのナシヨナリズムとはば一致し、アメリカ人一人一人に平等への使命感を与えていると述べる。

そして、歴史家ジョージ・バンクラフト (George Bancroft) が見出したアメリカ人の誇り、ターナーが指摘したフロンティアで生まれたアメリカ民主主義、そしてアダムスのアメリカン・ドリームを引用し、ヨーロッパにはない感覚がアメリカにはあると主張する<sup>19)</sup>。

しかしミュルダールはこうしてアメリカの特異性を指摘するのと同時に、アメリカのナシヨナリズムが国際的になりうる可能性を示唆する。「アメリカのナシヨナリズムは、アメリカの信条によって浸透し、それゆえに本質的には国際的になる」<sup>20)</sup> (強調は原文)。理解が困難な一節だが、前後関係から考えると、アメリカは多様な民族から構成された国家であるために、「アメリカの信条」という心理的なもので国民を統一するしかなかった。心理的なものによって広まったのだから、アメリカのナ

シヨナリズムはアメリカに住んでいない者でも理解できる、ということだろう。

ミュルダールがこのようにアメリカのナシヨナリズムの国際性を強調した理由はこの本が書かれた背景を意識することで理解できる。ミュルダールはヨーロッパにおけるナチスの台頭を目撃し、アメリカの民主的な社会に希望を託した——同時に、そこに人種的不平等という大きな問題があるのを認識していた。それゆえに彼は、「戦争の本」としてこの本を書いたと述べている<sup>20</sup>。

だからこそ、この本の結論にはアメリカへの過剰な信頼が書かれている。ミュルダールは最後の章で、人種的不平等が改善されるかどうかは正確にはわからないが、これまでの変化の傾向から考えて、「未来へのあらゆる可能性を見つけることができる」と述べている<sup>21</sup>。こうして、ヨーロッパの激しい人種差別を目標したために、アメリカを人種差別の少ない国と信じた欲望がこの本にはある。以上のように、『アメリカのジレンマ』はアメリカの平等主義的な性質のみによって生み出されたのではなく、第二次世界大戦という国際的な状況の産物でもある。

こうして生まれた『アメリカのジレンマ』は公民権運動に影響を与え、一九五四年のブラウン判決において言及されただけ

でなく、運動の代表的指導者マーティン・ルーサー・キング・ジュニアにも参照されることになる。ここでは希望を強調するキングの演説に注目し、絶望と希望とが入り混じる演説に関してはマルコム・Xやボールドウィンの主張を見た後で確認する。キングは一九六一年七月六日にリンカーン大学の学位授与式において、アメリカン・ドリームと「アメリカの信条」とを融合させた演説を行う。キングはまず、「私はあなたたちとアメリカン・ドリームのいくつかの側面について話したい。というのも本当の意味で、アメリカは本質的に夢、いまだ実現されていない夢だからだ。それは、全ての人種、全ての民族、全ての信条を持った人々が共に兄弟として住める土地の夢だ」と述べ、生活、自由、そして幸福の追求がアメリカでは不可侵の権利であると述べている独立宣言の一節を参照する<sup>22</sup>。そしてキングは、アメリカ人が民主主義を主張しながら人種差別を行っているジレンマに言及し、「これがスウェーデンの社会学者グンナー・ミュルダールが言及したアメリカのジレンマだ」と述べる<sup>23</sup>。ここでミュルダールが「アメリカの信条」として提示した問題をキングはアメリカン・ドリームとして提示する。このように信条から夢へと表現を変化させたのは、人種的平等はいまだに夢に過ぎないとキングが認識していたからかもしれない。また、詩人ラングストン・ヒューズ (Langston Hughes) の影響を受

けたキングにとって夢という言葉は重要な意味を帯びていた<sup>25</sup>。

更に、キングはアメリカン・ドリームと世界との関係を強調する。「アメリカン・ドリームは、同胞愛や平和や善意の世界というより大きな夢を欠いた現実には起こらない。我々が住んでいる世界は地理的には単一の世界であり、今日、我々はそれを精神的に単一にするように試されている」<sup>26</sup>。また、世界はつながっていると世界の問題に移り、「この世界に貧困がある限り、たとえ一〇億ドル持っていたとしてもその男は完全に豊かになることはできない」と述べる<sup>27</sup>。そして手段と目的の関係を考察し、たとえ目的が正しかったとしても手段を間違えてはいけないと述べ、非暴力という手段の有効性を主張する。

このキングのアメリカン・ドリーム使用は二つの点で注目値する。一つはアメリカン・ドリームという言葉の持つ愛国的な性格が薄まっていることである。キングはアメリカ国内の問題だけでなく、国外の貧困についても考察している。もう一つは、世界の相互関係という問題によって、個人の成功とアメリカン・ドリームとの間に亀裂を入れていることである。アメリカン・ドリームは個人の成功と結びつけられることが多い。たとえば、この演説とほぼ同時期の一九六三年に出版された『ぼろ切れから金持ちへ——ホレイシヨ・アルジャー・ジュニアと

アメリカン・ドリーム』において、アメリカの夢として、「アメリカは、どのような出自であったとしても、どれほど貧しく素性が卑しかったとしても、誰もが名声を得て富を手に入れることができる場所である」という考えが挙げられている<sup>28</sup>。この考え方は成功する機会の均等という現在の定義と直結したものであり、アルジャーの「ぼろ切れから金持ち」になる小説群はアメリカン・ドリームを体現した小説と今日では度々みなされる。それに対し、キングの定義によれば、世界中の人々が幸福にならなければアメリカン・ドリームは実現しない。

キングはこの演説だけでなく、一九六三年八月二八日のワシントン大行進の際にリンカーン記念堂の前でなされた「私には夢がある」の演説においてもアメリカン・ドリームに言及している。「それ（私の夢）は、いつの日かこの国が立ち上がりその信条（its creed）の真の意味を実現するというアメリカン・ドリームに深く根差す夢だ。私たち全ての人間は平等につくられたというこれらの真実を自明なものだと思っている」<sup>29</sup>。こうしてキングはこの演説においても自身の夢をアメリカン・ドリームに結び付け、人種の平等という夢を語る。

こうしたキングの演説は内容と形式、その両方においても統合を志向したものである。ニール・キャンベル（Neil Campbell）とアラスティア・キーン（Alastair Kean）はキングの修

辞法について以下のように述べている。「キングの演説には声の溶け合い、すなわち異なる主題を調和のある全体へと結びつけることへの強い関心があり、彼の演説のスタイルは彼が支持した統合の政治学 (the politics of integration) と対応している」<sup>30)</sup>。こうした「統合の政治学」の一つとして、キングはアメリカン・ドリームという白人の神話を用いて白人と黒人の統合を試みている。

セイント・クレア・ドレイクはこのように統合を志向するキングの考え方がある程度共有しているが、二人には大きな差異がある。ドレイクは一九一一年に生まれ一九九〇年に亡くなった人類学者である<sup>31)</sup>。また、スタンフォード大学の人類学の名誉教授であり、アフリカン・アメリカン・スタディーズの研究に多大な貢献を残した。更に、彼は一九五八年から一九六一年の間にガーナの大学の社会学部長となり、ガーナ最初の首相であるクワメ・エンクルマ (Kwame Nkrumah) の側近となった経験もある。

ドレイクは、奴隷解放一〇〇年を記念して一九六三年の一月三〇日、二月六日、そして二月一三日の三日間、ルーズベルト大学において「アメリカン・ドリームと黒人——自由の一〇〇年間？」という講演を行った。そしてその三回の講演は解放、教育、統合という三章に分けられて短い本となった。

ドレイクは歴史を分析する用語としてアメリカン・ドリームを用い、アフリカ系アメリカ人にとっての平等の変遷を辿る。まず彼はアメリカン・ドリームが時代とともに変化してきたと述べる。「一九六三年のアメリカン・ドリームは「アメリカ独立宣言が採択された」一七七六年のものとも、「奴隷解放宣言が発せられた」一八六三年のものとさえも異なる。それは不断に発展し、拡大し、新しい性質を帯びる何かなのだ」<sup>32)</sup>。そして独立宣言が平等と宣言しながらも黒人を含んでいなかったこと、奴隷廃止主義者の活動、そしてリンカーンの奴隷解放宣言など、徐々にアフリカ系アメリカ人を含んだ平等が実現してきた歴史を述べる。

しかし、未来について語る際、ドレイクは完全な人種統合を肯定しない。人種分離を支持するネイション・オブ・イスラムにある程度共感を示し、ドレイクは人種統合によるアイデンティティ喪失の可能性に言及する。そこで、「人種は統合しない、個人のみが統合する」と述べ、個人の関心に応じて集団が生まれ、人種が障害にならない社会を理想としている<sup>33)</sup> (強調は原文)。多民族社会を考えるうえで、多様な民族が溶け合うメルティング・ポットと各々の民族が独自性を保持して共存するサラダ・ポウルという二つの考え方があがるが、ドレイクはややサラダ・ポウルに近い考え方を選んでいく。

こうしたドレイクのアメリカン・ドリーム観は多くの者の影響を受けている。この講演を行った経緯として、「アメリカン・ドリームと黒人」という題名の講演を頼まれたと述べている<sup>34)</sup>。おそらく、リンカーン大学でのキングの講演によってアメリカン・ドリームへの関心が集まっていたのだろう。また、ウィリアム・モリス (William Morris) の『ジョン・ボールの夢』という小説に言及し、英国の自由のために戦った闘士の言葉をアメリカン・ドリームに相応しいものとみなしている。その言葉は闘士たちが形を変え続ける理想を追求することを肯定している<sup>35)</sup>。さらに、『アメリカのジレンマ』が参考文献表において古典的な分析として言及されている。そして、エビグラフにおいて詩人アーチボルド・マククリッシュ (Archibald MacLeish) がリンカーン記念堂で発表した詩が引用され、そこには夢への言及がある。「そして夢は失われた (……) 我々なることを運命づけられている神聖な夢を復興させよ!」<sup>36)</sup>。マククリッシュの詩はアメリカン・ドリームという言葉を直接用いていないが、リンカーンや独立宣言に言及することで奴隷解放と関連し、夢は人種の平等を意味している。

こうしてドレイクは様々な影響を消化し、アメリカの歴史を分析する用語としてアメリカン・ドリームを用いた。そして実体はなく姿を変え続けるものとアメリカン・ドリームを定義す

ることで、理想に関するアメリカ史を一望することを可能にした。とはいえ、このようにアメリカン・ドリームという言葉がアメリカ史の分析に用いることで、この言葉があたかも古くから存在するかのように思わせることに貢献してしまう。また、トランスアトランティックな奴隷貿易について触れているが、アメリカン・ドリームをアメリカ国内の状況を分析するために用いている。

こうしたアメリカン・ドリームの肯定的な使用法と対比的なのは公民権運動の指導者マルコムXのものである。マルコムは「投票権を、さもなければ銃弾を (The Ballot or The Bullet)」という一九六四年四月三日の講演においてアメリカン・ドリームに言及している。マルコムの思想は激しく変化していたために、マルコムが暗殺される前年の一九六四年にこの講演がなされたということに注意することが重要である。それまでマルコムは人種分離を主張したネイション・オブ・イスラムの代表的な人物の一人だったが、その指導者イライジャ・ムハンマド (Elijah Muhammad) との不和のために団体から離れ、一九六四年三月に「ムスリム・モスク・インク (Muslim Mosque Incorporated)」という自らの政治団体を結成した。この講演は「ムスリム・モスク・インク」の思想が形成され始めた時期に、公民権運動を指導した団体 CORE (人種の平等会議、the

Congress of Racial Equality) の支部がクリーブランドで開催した「黒人の反乱——次に来るのは何か?」(The Negro Revolt—What Comes Next?)と「シンポジウムで行われた。マルコムは講演の主旨は、アフリカ系アメリカ人に選挙権を与えないアメリカ民主主義の欺瞞である。マルコムは、黒人に投票権を与えようとする南部の民主党員、いわゆる「ディキシークラット(Dixiecrat)」を糾弾し、民主党も共和党も否定する。そしてアメリカ政府すら否定し、キングが「私には夢がある」の演説をしたワシントンの行進の意義すら否定する。そして公民権をアメリカ政府に訴えるのではなく、人権を国連に訴えることの重要性を訴える。更に、非暴力を訴えたキングと異なり、題名の「投票権を、さもなくば銃弾を」が示すように、投票権が与えられなければ暴力も辞さない姿勢を崩していない。そうした主張を展開する際にマルコムは以下のようにアメリカン・ドリームに言及している。

いや、私はアメリカ人ではない。私はアメリカニズムの犠牲者である二千二百万人の黒人の一人だ。民主主義、すなわち見せかけの偽善以外の何物でもないものの犠牲者である二千二百万人の黒人の一人だ。だから私は、アメリカ人、愛国者、国旗に敬礼する者、あるいは国旗を振る者としてあなた方に

話すためにここに立っているのではない。そうではない。私はこのアメリカのシステムの犠牲者として話しているのだ。そして私は犠牲者の目を通じてアメリカを見る。私はいかなるアメリカン・ドリームも見えていない。私はアメリカの悪夢を見ている<sup>(37)</sup>。

ここではアメリカン・ドリームが民主主義に近い意味で用いられ、アフリカ系アメリカ人は民主主義から疎外されていると述べられている。こうして、「私には夢がある」と述べるキングとは対照的に、マルコムはアメリカン・ドリームを信じることができない。こうしたマルコムのアメリカ観がキングの「私には夢がある」という演説に対抗して生まれたとみなす論者もいる<sup>(38)</sup>。とはいえ、アメリカン・ドリームという言葉の使用法という観点から見れば、二人の立場はそれほど離れていない。白いアメリカ人は平等を志向するにも拘らず黒いアメリカ人の成功を妨げるといふ、ミュルダールが指摘したアメリカのジレンマを前提にしているという点で、キングとマルコムは近い立場にいる。つまり、人種を超えた平等という意味でアメリカン・ドリームを用いるという点では同じだが、そこでこの言葉に肯定的になるのか、あるいは否定的になるのかという捉え方の違いが二人を隔てている。また、方向性は全く異なるが、国

際的な志向を持つという点でも二人は類似性を持っている。世界に貧困がある限りアメリカン・ドリームは実現しないとキングは述べているのに対し、マルコムは、その夢は欺瞞であるために国連に訴えるべきだと主張している。

公民権運動のスポークスパーソンとみなされたジェームズ・ボールドウィンもまた、ベストセラー『次は火だ』(1963)において、マルコムと同様に否定的な立場からアメリカン・ドリームに言及している。この本に収録されたエッセイ「十字架の下で」は、ボールドウィンがキリスト教牧師になるまでの過程やネイション・オブ・イスラムの指導者イライジャ・ムハンマドに対する反発と共感を描いている。ボールドウィンは、ネイション・オブ・イスラムが白人に押し付けられたキリスト教ではなく、自分たちの宗教を持つようとしていることに理解を示しながら、暴力を用いて不平等を解消しようとする姿勢に反対している。そして、黒人と白人がアメリカ国家で共存することを望む。しかし、現状に対する強い批判も見受けられる。この本の最後では「神はノアに虹の徴を与えた。もはや水ではない、次は火だ」という、黒人奴隷が聖書から作った歌の一節が用いられている。題名にもなったこの言葉は、人種の不平等を改善しなければ今後、恐ろしいことが起きるという白人への警告になっている<sup>39</sup>。ボールドウィンはこのエッセイの後半でアメリカ

カン・ドリームに言及し、その問題を分析している。

この国の黒人は決して権力を握ることができないが、混乱を引き起こしアメリカン・ドリームに幕を下ろすよう非常に巧みに配置されている。／もちろん、これはその夢の性質や、我々アメリカ人——どのような人種であっても——がその夢を検証する勇気がなく、その夢を現実にすることから遠ざかってきたという事実と密接に関わっている。「……」たとえば、人々は平等——結局、何とそして誰と平等なのか——になることにひどく熱心になるといふことはなく、優位であることを愛する<sup>40</sup>。

権力を握ることはできないようにこの国の黒人が配置されると述べられていることから、アメリカン・ドリームからアフリカ系アメリカ人が疎外されているという認識をボールドウィンが持っていることが推察される。さらに、ボールドウィンは人々が平等になろうとしているのかを疑っている。つまり、ボールドウィンにとってアメリカン・ドリームという概念は平等と結びついているが、多くの人々はそもそも平等を望んでいないと考えている。そして、こうした平等の拒絶という精神的な問題が政治的な制度にも深い影響を与えていると述べている。

更に、ポールドウィンは平等の拒絶という精神性を重視し、アメリカン・ドリームへの懐疑を三つのレベルで展開するが、その際、キングやマルコムにも通底した問題意識が見いだされる。ポールドウィンは、「それゆえにアメリカン・ドリームは悪夢により類似したものになっている——個人のレベルにおいても、国内のレベルにおいても、国際的なレベルにおいても」と述べる<sup>40</sup>。そして、夢について深く考えない性質が個人の問題であり、国内で起こったことに責任を持たないことが国内の問題であり、キューバ危機など他の国に災いをもたらすことが国際的な問題と述べられる（一九六二年にキューバにおけるソ連軍のミサイル基地建設をめぐりアメリカとソ連が対立し、アメリカがキューバの海上を封鎖した。キューバ危機はこの本が書かれた時期に起きた事件である）。こうしてポールドウィンは、平等を掲げつつ平等を避けるというアメリカの矛盾を指摘するという点ではマルコムと類似し、国際的な観点から夢を考察するという点でキングとマルコム、その両方に接近する。また、非暴力による白人と黒人の共存を望みつつも過激な題名を付けていることから、ポールドウィンがキングに共感しつつも、暴力も辞さないマルコムにもやや近づいていることが読み取れる——とはいえ、マルコムが自衛のための暴力の必要性を訴えているのに対し、ポールドウィンは不平等が続けば暴力的な事

件が起こるといふ予言をしているという大きな隔たりもある。それだけでなく、人は本質的に平等を望まないというポールドウィン独自の人間性への洞察も見出すことができる。こうして『次は火だ』におけるポールドウィンのアメリカン・ドリーム観は、アフリカ系アメリカ人への差別に関係しながら、同時に人種を超えた問題であり、個人・国内・国際、いずれのレベルにおいても弊害を持っているものというものである。

かくして、公民権運動の指導者達はアメリカン・ドリームという言葉を用いながら人種的不平等の改善を試みていた。その結果、公民権法や投票権法の制定など大きな成功を収めた。しかしこの運動には多くの暗い事件が付きまわっていた。マルコムは一九六五年に暗殺され、キングは一九六八年に暗殺される。こうした暗い時代を反映するように、キングは死の一年前である一九六七年のクリスマスの演説では夢を語る事ができない<sup>41</sup>。以前は夢について語っていたが、「私はその夢について語ったすぐ後に、それが悪夢に変わるのを見るようになったと今日、告白しなければならぬ」と述べている<sup>42</sup>。そしてパーミンガムの黒人の少女が殺害された事件に触れている。しかし、「それにもかかわらず、私は今なお私には夢があると今言っている。それを締めくくる、なぜなら、ご存知のように人生で諦めることはできないからだ。もし希望を失えば、どういふわけか人生を

動かし続けるあの活力を失い、然るべき勇氣、すなわち全てを無視して進み続けさせるあの性質を失ってしまう」<sup>(4)</sup>。このように、マルコムやポールドウィンのように夢が悪夢と紙一重であることを認識しながら、この講演のキングは夢を見ること自体の意義を強調した——夢がなければ人は生きていけないために。以上のように、公民権運動の時代にはアメリカン・ドリームという言葉の使用に指導者一人一人の思想が刻まれ、その解釈に類似と差異が生じていた。

## 結論

アメリカン・ドリームは、一九三一年にジェイムズ・トラスロー・アダムの『アメリカの叙事詩』が普及させた言葉だが、

一七七六年に採択された独立宣言にある平等の概念と親近性を持つ言葉である。こうした親近性がこの言葉に根拠のない伝統らしさを付与している。また、アダムスがアメリカン・ドリームを定義する際に強調した知的な機会の均等という要素は忘れ去られ、現在では個人が経済的に成功する機会の均等を意味することが多くなっている。

その後、公民権運動のスポークスパーソン達はアメリカン・ドリームという言葉を入種の平等の意味で用いた。しかし、彼らの解釈には差異があり、否定的に言及するものや国外の問題との関連に言及するものがあつた。アメリカン・ドリームという言葉の歴史を辿り、その様々な解釈に注目する時、誰もが平等に成功する機会を持てる夢の国アメリカという神話は再検討を余儀なくされる。

## 註

(1) Jim Cullen, *The American Dream: A Short History of an Idea That Shaped a Nation* (Oxford: Oxford University Press, 2003).

(2) Lawrence R. Samuel, *The American Dream: A Cultural His-*

*tory* (Syracuse: Syracuse University Press, 2012). サムエル  
の『アメリカン・ドリーム』は刺激的な本だが、重大な欠陥を  
抱えている。ジム・カレンはサムエルの研究書への辛辣な書  
評において、サムエルが言及するのは新聞や雑誌の記事のみ

ひるがため、「次文献を読むべきなら」のではなかろうかと述べられている。そこで本論文は「次文献を可能な限り引用する」。

- Jim Cullen. Review of *The American Dream: A Cultural History*, written by Lawrence R. Samuel. *Reviews in History* (review no.1381), Feb 2013, accessed June 23, 2017, <http://www.history.ac.uk/reviews/review/1381>.
- (9) Eric Hobsbawm, "Introduction: Inventing Traditions," in *The Invention of Tradition*, ed. Eric Hobsbawm and Terence Ranger (Cambridge: Cambridge University Press, 1983), pp.1-14 (1).
- (4) *Oxford English Dictionary*, s.v. "American Dream," accessed June 24, 2017, <http://www.oed.com/view/Entry/6342?redirectedFrom=american+dream#eid5337887>.
- (5) *Ibid*.
- (6) *Ibid*.
- (7) Cal Jillson, *Pursuing the American Dream: Opportunity and Exclusion over Four Centuries* (Lawrence: the University Press of Kansas, 2004), p. 6.
- (8) Walter Lippmann, *Drift and Mastery: An Attempt to Diagnose the Current Unrest* (New York: Mitchell Kennerly, 1914), p.178.
- (9) ナンソン同様の意見を表している。Jillson, op. cit., p. 6.
- (10) Cullen, op. cit., p. 4.
- (11) Allan Nevins, *James Truslow Adams: Historian of the American Dream* (Urbana: University of Illinois Press, 1968), p. 68n41.
- (12) Accessed May 28, 2017, <https://www.loc.gov/>, 検索の

際に『アメリカ、その夢 (America the Dream)』など紛らわしい題名は数に含まなかった。他方で、異なる出版社から出版された同名の本は数に含まれた。

- (13) Raymond C. Knox, *Religion and the American Dream* (New York: Columbia University Press, 1934), pp. 4-5.
- (14) James Truslow Adams, *The Epic of America* (New York: Blue Ribbon Books, 1931), p. 404.
- (15) *Ibid.*, p. 413.
- (16) ホールドウインは一九六五年の二月にケンブリッジ大学において「アメリカン・ドリームはアメリカの黒人を犠牲にしてゐる」という題名の討論会に参加している。ホールドウインはこの題名に賛成の立場から意見を述べ、右翼的政治評論で知られた「ナショナル・レビュー」誌の編集者ウィリアム・F・ハックリー・ジュニア (William F. Buckley Jr.) は反対の立場を主張した。ただし、この討論はホールドウインが『次は火だ』で書かれた主張を繰り返しているため、本論では詳しく言及しない。"The American Dream," *New York Times* (New York), Mar. 7, 1965.
- (17) まだ、分析対象をこの四人に絞るのは公民権運動で活躍した女性運動家を含んでいらないなどの問題があるが、他の運動家がアメリカン・ドリームという言葉を用いていたのかを調べるのは今後の課題である。
- (18) キンズモントロトの思想の変化については James H. Cone, *Martin & Malcolm & America: A Dream or a Nightmare* (New York: Orbis Books, 1995) と上坂昇『キンズ牧師・ロマン』(講談社現代新書、一九九四年)を参照。  
ミョルダールの背景と『アメリカン・シモンズ』の主要な論点

- 1963), p. 4.  
 (20) King, "I Have a Dream," in *Hope*, pp. 217-220 (219).  
 (21) Neil Campbell and Alasdair Kean, *American Cultural Studies: An Introduction to American Culture*, 4th edition (New York: Routledge, 2016), p. 103.  
 (22) 入種差別論者「弁論主義者 (vindicationist)」による種族差別的な議論の展開とその人種問題への関与に関する研究をまとめた論文を収録した『Wille L. Barber: "St. Clair Drake: Scholar and Activist" in *African-American Pioneers in Anthropology*, edited by Ira E. Harrison, and Faye V. Harrison (Chicago: University of Illinois Press, 1999), pp. 191-212.  
 (23) Drake, St. Clair, *The American Dream and the Negro: 100 Years of Freedom* (Chicago: Roosevelt University, 1963), p. 11.  
 (24) *Ibid.*, pp. 61-62.  
 (25) *Ibid.*, p. 11.  
 (26) *Ibid.*, epigraph. フォン・ネーグの詩の全体像は『ドレイクの文庫』を参照せよ。 Archibald MacLeish, "At the Lincoln Memorial" in *Collected Poems, 1917-1982*, edited by Richard B. McAdoo (Boston: Houghton Mifflin Company, 1985), pp. 432-435.  
 (27) Malcolm X, "The Ballot or the Bullet" in *Malcom X Speaks: Selected Speeches and Statements*, edited by George Breitman (New York: Pathfinder, 1985), pp. 23-44 (26).  
 (28) Come, op. cit., p. 111.  
 (29) James Baldwin, "Down at the Cross," in *The Fire Next Time*, 1963 (New York: Vintage International, 1993), pp. 11-106 (106).  
 (30) Walter A. Jackson, *Gunnar Myrdal and America's Conscience: Social Engineer and Racial Liberalism, 1938-1987* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1990) 巻頭語より。  
 (31) Gunnar Myrdal, *An American Dilemma Volume 1: The Negro Problem and Modern Democracy*, 1944 (New Brunswick: Transaction Publishers, 1998), pp. 5-6.  
 (32) *Ibid.*, p. 6.  
 (33) Jackson, op. cit., p. xviii.  
 (34) Myrdal, *An American Dilemma Volume 2: The Negro Problem and Modern Democracy*, 1944 (New Brunswick: Transaction Publishers, 1997), p. 998.  
 (35) Martin Luther King Jr., "The American Dream," in *A Testament of Hope: The Essential Writings and Speeches of Martin Luther King Jr.* (San Francisco: HarperOne, 1986), pp. 208-216 (208).  
 (36) *Ibid.*, p. 209.  
 (37) M. マイヤン・ミラー (W. Jason Miller) は、コナーズがキングの影響を考察した著書の中で、キングがコナーズの「延期された夢 (Dream Deferred)」に「影響を受けた夢」の言葉や好むように用いたことを指摘している。 W. Jason Miller, *Origins of Dream: Hughes's Poetry and King's Rhetoric* (University Press of Florida, 2015) 巻頭語を参照せよ。  
 (38) King, op. cit., p. 209.  
 (39) *Ibid.*, p. 210.  
 (40) John Tebbel, *From Rags to Riches: Horatio Alger, Jr., and The American Dream* (New York: Macmillan Company,

(40) Ibid. p. 88.

(41) Ibid. p. 89.

(42) ミラーは、一九五九年四月五日のキヌムメモリーでの講演で既にキングが「砕けた夢」という言葉を用いていたことを指摘している。そのため、必ずしも発展的にキングの夢への言及が希望

から失望に変化したわけではないことに注意する必要がある。

Miller, op. cit., p. 88-92.

(43) King, "A Christmas Sermon on Peace," in *Hope*, pp. 253-258 (257).

(44) Ibid., p. 257.

(しらき みつよし／博士後期課程)